

②つれづれと長雨降る日は青柳のいとど憂き世にみだれてぞふる
という贈答歌が見える。宮の弁のおもとの「いつか参り給ふ」の書
信および①の歌に詠み込まれた「いと久しくもなりけるかな」の
句によって、式部が三月になっても依然として参内していないこと
が判明する。②の「いとど憂き世にみだれてぞふる」は、①の「い
ま九重ぞ思ひみだるる」に通じ合う心情であろう。そんな彼女は、
「かばかり思ひ屈しぬべき身を、いといたうも上衆めくかな」と批
難されたりもする(③)。

ところで、寛弘四年に入ると、同じ里邸に在るにしても、

紅梅を折りて、里より参らすとて、

(103)埋れ木の下にやつるる梅の花香をだに散らせる雲の上まで

という献歌には、①②等極度の鬱屈した内面より由来する逃避
的態度が見られない。岡先生は、「この歌は中宮の御心を動かし、
弟の惟規は少内記から兵部丞に陞り、藏人に補せられた」と説かれ
たが「源氏物語の基礎、やや前途に明るい見通しのでてきた情況が、こ
の寛弘四年春の式部の身辺なのである。そして、四月には伊勢大輔
に譲りはしたものの、興福寺の桜取り入れの役に任ぜられるくらい
になっており、また、「いとうち解けては見えじとむ思」われて
いた、中宮彰子の歌の代作までし奉るに至っているのである。

こうして見てくると、①②の歌群に詠み込まれた心情は、とて
も寛弘四年春のそれとは考えられまい。その不調和性は、式部の初
宮仕えを寛弘二年暮としてこそ、明くる初春の心境に①②の歌境
が一致することで、解消するのである。したがって、加納氏の論拠
も柴式部の寛弘二年出仕説を否定するものではなく、むしろこれを
積極的に傍証するものと考えていただけらると思う。(72・11・29)

研究余瀆 I「今物語」人物小考

◇説話文学には、三人称や官名などで記された人物がたびたび
登場する。鎌倉期に成った『今物語』の十九段の主人公「左馬
権頭」もその一人である。御白河院御幸の御供で日吉神社に参
った時、上達部が詠んだ上の句に見事な下の句を付けたという
この左馬権頭は、加茂臨時祭の舞人の経験もあつたらしい。こ
のことを考え合わせると、本話の主人公として興味深い人物が
あがつてくる。即ち、後白河院の日吉御幸(仁安二年・十月二
十五日)があつた同じ仁安二年(一一六七)の十一月二十一日
に賀茂臨時祭の舞人となつた藤原隆信(一一四二—一一〇五)
である(『百鍊抄』『玉葉』『兵範記』)。もっとも隆信が左馬
権頭としてその名が見えるのは、承安三年(一一七二)十月十
七日の「広田社歌合」に出詠している際が最初で、舞人をつと
めた仁安二年は右馬権頭に位していた(永万二年一一六六
八月二十六日開催の「中宮亮重家朝臣歌合」の作者の中に
「右馬権頭隆信」とある)のだが、他に左馬権頭の名は所見が
ない。また、家集『隆信朝臣集』下八恋六Vに「後白河院の御
ともしに日吉にまゐりこもりてみやこなる女のもとへいひをくり
し」と詞書した歌が見えるので、「左馬権頭」と「右馬権頭」
の差異はあるが、指名を受けるほど歌人としても認められてい
た本話の主人公「左馬権頭」に該当する人物として、藤原隆信
を掲げてよいと思う。作者信実も父のことなので自明のこと
として官名だけをあげたのではないだろうか。(角津典子)